Bulletin of Jumonji University, vol.51, 2020

研究ノート

1970年代移動図書館史研究序説
―埼玉県立浦和図書館における一日図書館を中心に―

An Introduction to the Study of Mobile Library in the 1970s: "Ichinichi Toshokan" in SaitamaPrefectural Urawa Library

石川　敬史[1)]
ISHIKAWA　Takashi

中岡　貴裕[2)]
NAKAOKA　Takahiro

要　旨

埼玉県立浦和図書館は1972年１月18日に一日図書館「むさしの号」の巡回を開始した。大型バスを改造して約4,500冊積載の書架を装備し，大規模団地を対象に２時間から５時間半に及んだ活動は，新聞などにおいて大きく報道された。本研究では，一日図書館の成立と最盛期の活動内容を実証的に明らかにするため，当時，一日図書館の活動に関わった元図書館員へのインタビュー記録に基づきながら，関係資料も用いて分析した。その結果，一日図書館の巡回の背景には，団地建設や人口増による図書館利用への要求や，市町村の図書館設置への機運の醸成があった。同時に，一日図書館の成立と活動を遡ると，巡回先を調整し，住民の中へ入り込み巡回を重ねる過程において，一日図書館を媒介としながら人と人との関係性を積み重ね，個々の地域との結びつきを深めていたことが明らかになった。1970年代の一日図書館は，単に大規模団地へ大量の本を運んでいたのではなく，埼玉県立図書館を核とする「図書館」ネットワークを運んでいた。

１．研究の視角と目的

埼玉県立浦和図書館は，1972年１月18日に一日図書館「むさしの号」（以下，一日図書館とする）の巡回を開始した。大型観光バスを改造して約4,500冊積載の書架を装備し，大規模団地を対象に２時間から５時間半に及ぶ長時間の駐車，毎月１回の定期巡回，貸出に限らず調査相談やおはなし会，映画会なども行われた活動は，新聞などに大きく報道された[1)]。当時の公立図書館による移動図書館[2)]の一般的な傾向として，トラックやマイクロバスを改造した約1,000－2,000冊積載の自動車で，ステーション１ヵ所につき30－60分前後の駐車，２週間もしくは月に１回の定期巡回が

[1)] 十文字学園女子大学 教育人文学部　文芸文化学科
Department of Early Childfood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University
[2)] 和光市役所
Wako City Hall
キーワード：移動図書館，自動車文庫，自動車図書館，図書館史，公立図書館

通例[3]であり，すでに同館も1970年の時点で移動図書館「むさしの号」（４台：約800冊前後の積載，以下「むさしの号」とする）を保有していた。巡回方法と自動車の改造内容をみても，この一日図書館は特異な移動図書館であったことがわかる。そこで本稿では，一日図書館の成立と最盛期の活動内容を実証的に明らかにするため，この当時,「むさしの号」や一日図書館の活動に携わった元図書館員へのインタビュー記録に基づきながら，関係資料も用いて分析する。

こうした一日図書館を検討することは，戦後日本の移動図書館史研究において次の点を考察することにつながる。第一に，地域を巡回する移動図書館の目的の変化である。戦後日本の移動図書館は，1949年９月に巡回を開始した千葉県立中央図書館による「訪問図書館ひかり」（以下,「ひかり号」とする）が先駆けであった[4]。開架式の書架，個人貸出，アンプ・スピーカーが装備された自動車が村々を走り，併せて映画会や演芸会も開催された。埼玉県立図書館においても「ひかり号」の影響を受け，1950年９月に移動図書館「むさしの号」の巡回を開始した。巡回開始当時の移動図書館は，図書の入手が困難な時代を背景とした「文化の水平運動」[5]であり，読書会の組織化をはじめとする「青年文化活動」[6]としての性格を有していた。他方で，１台の移動図書館で1965年９月に巡回を開始した日野市立図書館による移動図書館「ひまわり号」は，貸出の重視，全域へのサービス，資料が第一という運営方針[7]を背景に全国に大きな影響を与え，日本の公立図書館の変革につながった。このように自動車の装備や移動図書館の活動方法に当時の図書館の目指す姿が体現されているとすれば[8]，一日図書館の成立と活動内容を辿ることは，1970年代における埼玉県立図書館の目指す姿と都道府県立図書館（以下，県立図書館とする）が担う移動図書館の目的を検討することにもつながる。

そしてこのことは第二に，県立図書館の役割の変遷に関する再検討に結びつくことである。戦後日本の移動図書館史を遡ると，1950年代は県立図書館による移動図書館が中心であったが，1960年代中頃から市区立図書館による移動図書館が急激に増加し，1970年代後半からは町村立図書館による移動図書館も増加した[9]。すなわち，地域住民への直接サービスを担う移動図書館の台数は，県立図書館から市区町村立図書館へと移行していることがわかる。かつて薬袋秀樹は，戦後県立図書館論の時代区分を，①市立図書館の代行・モデルとしての県立図書館（1945－1962年），②県立図書館の模索期（1963－1969年），③＜協力・援助型＞県立図書館の形成期（1970－1976年），④＜協力・援助型＞県立図書館の定着期（1977年－）と整理した[10]。1972年１月に巡回を開始した一日図書館，加えて同年６月に巡回を開始した一日図書館２号車を検討することは，埼玉県立図書館が1979年に３館の体制で移動図書館を合計８台保有（浦和４台，熊谷２台，川越２台）[11]するに至るものの，しだいに市町村立図書館を対象とする協力車の運行へと移行していくように，地域住民に対する直接サービスと県内の市町村立図書館への支援という間接サービスとの関係性を再検討することにも結びつく。

第三に，首都圏郊外に相次いで建設された大規模団地との関わりである。1950年代から移動図書館の受け入れ組織となった青年団や町内会などの地縁組織とは異なり，新たに開発された団地に集まった新住民は，移動図書館をどのように利用し，どのように支えていたのであろうか。例えば，埼玉県南部に位置する和光市の西大和団地において，1972年１月18日に一日図書館の開館式が行われ，団地自治会文庫の「ありんこ読書会」のメンバーらが一日図書館の定期巡回を支え続けた。また同市では，一日図書館が巡回していた諏訪原団地の住民や親子読書会のメンバーらによる「和光市に移動図書館をつくる会」の請願署名運動を背景に，1973年12月に移動図書館「やまびこ号」１台で図書館が開館した[12]。原武史は戦後思想史の視角から，首都圏郊外の団地を対象に鉄道

というインフラが住民の意識を規定していること，団地こそが1960－1970年代における革新的な政治意識を支える有力な基盤になったことを論じている[13]。大規模団地を巡回の対象としていた一日図書館を検討することは，自治会活動の一環としての地域文庫の成立とともに，地域に図書館の設置を要求する図書館づくり住民運動への広がりと連続性を検討することにもつながる。

第四に，現在の固定化・定型化される傾向にある移動図書館の巡回方法に関する再検討である。『日本の図書館』（日本図書館協会）によると，2019年に全国で540台の移動図書館が巡回している[14]。台数の推移をみると，1997年の697台をピークに減少し続けていたが，東日本大震災の被災地支援活動において移動図書館が再評価[15]されたことにより，2011年以降は減少数が緩やかになっている。東日本大震災から約10年が経過した近年，確かに創造的な移動図書館実践を重ねている地域[16]をみることができるが，総じて移動図書館を担う現場では，眼前の移動図書館を安定的に着実に運行するために，現状を維持し守るという傾向にあることも事実である。移動図書館とは「移動」する図書館であるならば，図書館サービスや図書館資料，図書館員を地域のどこへどのように「移動」するのかという課題もあろう[17]。長時間の駐車，おはなし会などのさまざまな活動を伴いながら「移動」した一日図書館の活動方法を分析することは，現在の移動図書館の活動方法を再検討することにも結びつくといえる。

2．インタビュー調査

オーラルヒストリーという研究方法の意義や目的，語り手と聞き手との関係性などは，すでに大門正克[18]や桜井厚[19]などから言及されている。図書館史の領域においても小黒浩司[20]，石川敬史[21]，三浦太郎[22]が課題を整理しているほか，小林卓[23]や奥泉和久ら[24]による研究成果もある。本研究ではこうした研究成果や課題を踏まえながら，関係資料からはうかがい知ることができない埼玉県立浦和図書館による一日図書館を中心に，当時，同館の移動図書館に携わっていた長谷川周氏と山岸輝雄氏にインタビュー調査を実施した[25]。インタビュー日時や略歴は次の通りである。

なお，本稿に掲載したインタビュー記録については，内容を整理・抜粋するとともに，括弧書きで補筆した箇所もある。インタビュー記録の詳細については，今後，本研究の報告書としてまとめる予定である[26]。

（1）日時・場所

・2020年２月１日　13：00－16：00

・埼玉県男女共同参画推進センター（With you さいたま）　準備室１

（2）長谷川周氏

昭和22（1947）年８月生まれ。大学を卒業後，司書講習にて司書資格を取得。昭和46（1971）年４月埼玉県立図書館。県立浦和図書館・館外奉仕課移動奉仕係にて移動図書館を担当。以後，吹上町立図書館長，浦和市立南浦和図書館長，県立川越図書館・館内奉仕部長，県立浦和図書館副館長などを歴任。

（3）山岸輝雄氏

昭和19（1944）年11月生まれ。道路公団などを経て，昭和47（1972）年１月埼玉県立図書館。県立浦和図書館・館外奉仕課移動奉仕係にて新規に巡回を開始した一日図書館を担当。司書講習にて司書資格を取得。以後，県立浦和図書館や県立熊谷図書館において一日図書館や移動図書館の巡回に携わる。

3．インタビュー記録の分析

3.1　巡回開始の経緯

埼玉県立図書館が一日図書館の巡回を開始した背景は，埼玉県南部を中心に大規模団地の建設と人口が急増したことに伴い，800冊前後の図書を積載し60分前後の巡回で行われている従来型の移動図書館では対応が難しくなったことにあった。

県南部の団地の建設をみると，1960年前後には新所沢団地（2,455戸：所沢市），南浦和団地（1,253戸：浦和市），草加松原団地（5,926戸：草加市）などが，1960年代後半には田島団地（1,907戸：浦和市），武里団地（5,559戸：春日部市）などが相次いで建設された[27]。これに伴い，県内の人口増加率が全国１位を記録（24.7％：1970－1975年）するなど，とりわけ人口増は県南部に集中していた[28]。こうした人口急増に対して埼玉県移動図書館運営協議会は，1969年９月，「移動図書館車を増設し，団地，新住宅地，事業所等に対して貸出し，館外奉仕の万全を期すること」[29] などを埼玉県立図書館へ要望している。すでに同館では，1960年代中頃から県南部の団地急増に対する問題点を指摘[30]，1971年４－８月には「地域住民の多様な要求増大，地域文庫普及拡大の傾向，移動図書館サービスの限界等により，その対策を検討，大型図書館車構想の館内検討」と記録されている[31]。長谷川氏のインタビュー記録にあるように一日図書館成立のきっかけが知事選挙の影響とはいえ，すでに同館の職員間にて大規模団地急増に対する問題意識が共有されていたため，速やかに一日図書館の立案が可能であったといえよう。

なお，一日図書館巡回までの経緯を辿ると，1971年８月12日に追加予算要求，同年10月13日に埼玉県議会議決，12月14日に対象市町村説明会開催，同月18日に自動車を発注，翌年１月８日に納車・図書資料を積載，そして１月18日に巡回開始へと至った[32]。1971年９月25日の埼玉県議会９月定例会（第１日目）において，埼玉県知事・栗原浩は「1971年度埼玉県一般会計補正予算（第96号議案）」の説明にて一日図書館を次のように発言している[33]。

> 主として都市化地域における県民を対象に，文化活動を推進するため，一日図書館を定期的に開設することといたしました。

同年10月11日（第17日目）の文教警察委員会報告においても，委員会担当議員より「五百戸以上の住宅団地を中心に巡回し，貸し出し，読書相談にも応じるとのことでありました」[34] と言及している。一日図書館２号車については，1972年３月の県議会にて予算を議決，同年４月に発注，５月８日に納車，そして６月13日に巡回を開始した[35]。同年２月29日の埼玉県議会２月定例会（第１日目）において，知事・栗原は次年度（1972年度）予算説明の中で「好評でありました一日図書館の充実をはかりますための措置を講ずることといたしました」[36] と説明している。

長谷川：一日図書館ができた背景は過密対策ですね。当時，県南部の自治体は人口急増に対応するため，都市基盤整備に追われていましたので……。新興住宅地からは「移動図書館に来てほしい」という声も多く寄せられていました。当時の県の移動図書館「むさしの号」は800冊くらいしか積載できず，とても対応できない状況でした。知事選[37] があった関係で過密対策としてできることが求められ，図書館サイドとしては大きな車で各地を回った方が良いのではないかということを提案したら補正予算がついたという経緯があります。

石川：全国を見渡しても大型バスを移動図書館に改造して巡回する図書館はなかなか無いですよね。

長谷川：その頃，条件が整っていたところというのは，神奈川県，千葉県，埼玉県，そして東京都，大阪府くらいしかなかったと思います。

石川：お話をお聞きするとトントン拍子で進んでいったように感じてしまうのですが……。

長谷川：知事選があって，やはりその目玉になったことが大きいでしょうね。１月に一日図書館ができて，実際に巡回が始まったらワッと利用があるのを知事が目にして，２号車の予算もすぐつきました（笑）。

山岸：本当にすぐだったよね！

長谷川：次年度（1972年度）の予算要求を出し終

わって，ホッとしていたら，突然財政サイドから「大型バスをつくれ」といわれて，急遽予算書を作ることになったんですよ（笑）。１日でできたから一日図書館（笑）。私はちょうどその日,「むさしの号」で巡回に出ていましたが，帰ってきたら館内があわただしくて「何かあったんですか？」と聞いたら，財政担当課から連絡があって「今日中に予算書をつくれ」ということでね（笑）。当時，渡辺雅夫さん（館外奉仕課長）や酒井隆さん（館外奉仕係長）[38] などたまたまその時巡回に出ていない職員が作った予算書を担当課に持っていったと聞きましたね。

山岸：昭和47（1972）年１月に一日図書館車が納車されましたが，約4,500冊の図書を積み込んだ大変な思いをした記憶があります（笑）。

3.2　巡回の目的

一日図書館の巡回の目的は，県南部の大規模団地急増に伴う地域住民への直接サービスに限らなかった。当時の同館館長・江袋文男は各地の団地住民の要望に対し「市町村図書館行政は，これにじゅうぶんに対応することが不可能となってきた」とし,「埼玉県の特殊事情から，当分の間，これを補完するために県立一日図書館むさしの号を発案した」[39] としている。当時，一日図書館を担う現場の視点から山岸氏も「一日も早く各市町村立図書館が設立されることを前提に活動を展開しています」[40] と指摘しているように，一日図書館の巡回の条件として市町村が「図書館組織網に関する将来計画を策定すること」[41] とあった。

1973年４月の埼玉県内における市町村立図書館の設置率は39.2%（36館），市立図書館における移動図書館台数も６台（５館）に留まっていたため，各市町村における図書館サービス網（分館，移動図書館）の拡充が指摘されはじめた時代であった[42]。同時に，埼玉県立図書館においても，図書館未設置地域に対して，移動図書館の巡回を通して「自主的図書館活動の拠点育成」[43] を図り,「市町村立図書館の設置及び整備充実への基盤を形成してゆくことこそが，県立の移動図書館の目的とするところ」[44] と示された時期でもあった。まさにこうした埼玉県立図書館の転換期に一日図書館の巡回を開始したことがわかる。

石川：一日図書館について，県としては各市町村において図書館活動が活発になるまでの過渡的な位置づけとしていたようですが，それは一日図書館が始まった時からそのような方針だったのでしょうか？

山岸：もっと図書館が増えていけばいいなとね。もう現在では一つの自治体に複数の図書館がありますが，当時は図書館が本当に無かったですからね。

長谷川：移動図書館を起点にして各地の図書館をつくっていこうと。1960年代くらいまでは移動図書館は読書普及運動を推進すると言われていたわけだけども，三多摩の影響などもあって，これは「図書館」普及運動なのだと。「図書館」普及運動の核になるのが移動図書館を使っている人なわけです。だから県の移動図書館の数が減っていったとき，県が直接サービスをするのではなく，図書館間の協力に活動を移していくべきなんじゃないかという議論をしましたね。月に１回は最低巡回しなければならないという意見もあったりして，事務室で車座になって議論しました（笑）。それを聞いていた酒井さんや渡辺さんが直接サービスから間接サービスに切り替えていくという考えを示唆して,「どういうものにすべきか研究しろ」と言われたけど，当時は全然分からなかったね……。

山岸：一日図書館の統計を見るとわかるけど，昭和54（1979）年から昭和55（1980）年くらいから利用者が減ってきています。一日図書館は２台も要らなくなったということになるわけですよね。そのうち１台をどこかの地域に譲って，１台で配本所方式にて巡回するようになって，

写真 1－4.　一日図書館開館式（和光市役所所蔵資料：和光市秘書広報課提供）

県立久喜図書館ができるころには県立図書館の移動図書館はだんだん無くなっていく方向でした。その中で相互貸借を県立浦和図書館で考えるようになりました。はじめのうちは県立浦和図書館から県立川越・熊谷・久喜図書館と回るコースを作って連絡車を走らせました。

長谷川：試行錯誤だったよね。

3.3　和光市・西大和団地での開館式

一日図書館は，1972年１月13日の命名式を経て同月18日から巡回を開始した。初回の巡回先は和光市の西大和団地であったことから，ここで一日図書館開館式が行なわれた。当時の『広報わこう』にも「一日図書館開館式が行なわれます」という見出しで９：30から西大和団地集会所広場で開催されることが告知された[45]。和光市役所に所蔵されている写真をみると（写真１－４），一日図書館の車体に装飾が施され，西大和団地集会室の上部には「祝一日図書館開館」と横断幕が飾られている。県立図書館関係者の挨拶も相次ぎ，多くの利用があったことがわかる。同日の西大和団地では12：00までの停車，続く13：00から15：00までは同市の諏訪原団地駐車場へ巡回した[46]。同日の西大和団地での利用状況は，貸出総冊数が612冊（うち児童書が347冊），利用人数が189人，他方で諏訪原団地では貸出総冊数394冊（うち児童書226冊），利用人数108人であった[47]。なお同年４月からは西大和団地と諏訪原団地の停車時間が延長され，10：30から15：00までとなっている[48]。

山岸：和光市は何といっても一日図書館の開館式をやったところですね。団地の広場のところでね。

石川：一日図書館の開館式は，なぜ和光市の西大

和団地で行われたのでしょうか？
山岸：おそらく巡回の関係だったと思います。
長谷川：巡回ルートの順番でしょうね。
中岡：たまたま巡回ルートの最初が和光市だったということでしょうか？
長谷川：そうだったと思います。
中岡：写真を見ると，開館式ですのでラッピングをしたり車体にお花をつけたりしていますね。
山岸：飾りつけは県立浦和図書館ではやっていないですね。おそらく和光市で飾り付けてくれたのではないでしょうか。
長谷川：もちろん，走る時に邪魔になるから付けては行ってないでしょうね（笑）。和光市に着いた時に開館式だからということで飾り付けてくれたのだと思いますよ。

3.4　利用状況

一日図書館における貸出条件は一人３冊以内，返却は次回の巡回（一か月後）までであった。巡回開始の1972年１月18日から12月31日の利用実績（28ステーション）をみると，総貸出冊数約21万冊（１日平均997冊），うち児童書の総貸出冊数約10万冊，総利用世帯数約４万世帯（１日平均184世帯），リクエスト件数約４千件に及んだ[49]。この当時，最も貸出冊数が多かったステーションは，新所沢団地（23,619冊），次いで松原団地（18,654冊），田島団地（14,417冊），新座団地（12,475冊），西大和団地（11,334冊）と続き，（初回の巡回時を除くと）１巡回あたり1,300－2,700冊の貸出をしていた記録がある[50]。10：30－15：00の開館時間（270分間）を踏まえると最大で１分に10冊の貸出があったことになり，同時に返却作業も加えると，かなりの作業量であったことがうかがえる。

ステーションではこうした貸出・返却以外にも，紙芝居やおはなし会を屋外で行う写真が掲載され，「ときには，団地の集会所で，公民館で，また，青空の下で，木かげで，紙芝居，読み聞かせ，幻灯，映画会なども開いております」[51]とあった。しかし実際の一日図書館の現場では，このような活動は難しかったようである。

石川：一日図書館が各地のステーションに停車している間，どのような活動をしていたのでしょうか？
山岸：午前は10時から12時まで，午後は１時から３時までに時間は区切られていましたね。大きい団地では一日停車していることもありました。
石川：一日図書館を紹介した当時の映像[52]をみると，おはなし会などの場面もありましたが……。
山岸：そういった活動は全てのステーションではないですね。でも子どもたちが集まってくると，読み聞かせをすることもありました。紙芝居も積んでいて，例えば大井の電電公社住宅では紙芝居をやった記憶があります。小さいお子さんもいましたが，結構大人が多かった記憶がありますね。
石川：やはり貸出の列ができてしまうと，なかなか難しいということでしょうか。
山岸：そうですね。当時は本当にひっきりなしでしたからね。
長谷川：私の記憶だと，新所沢で多いところでは2,700冊くらい貸し出すところもあったんですよ。今はコンピューターがあるから１日2,000冊なんて当たり前に聞こえるかもしれないけどね。
山岸：当時はカード式での貸出でしたからね。
長谷川：私なんかは「むさしの号」で巡回していた時，特に忙しいところでは利用者にカードを全部抜いてもらっていましたね。借りた本のカードを入れた利用券を，バケツの中にポンポン入れてもらっていました。駐車時間が終わると利用統計を取って，利用者の名前順に並べていきました。返却時も借りた本のカードを利用者に入れてもらって，それを私らがリクエストがあるものかどうかをざっとみて，そのあと運

搬箱に運び込みました。ちょっと立ち話で止まることがあると，机がすぐ本の山になるくらいでしたね。

……（略）……

石川：それだけ貸出があったということですね。

長谷川：積載図書の構成は，一般書50・児童書50の比率でした。昭和45（1970）年以前は，「むさしの号」の積載図書約800冊のうち，児童書が200冊ぐらいでしたが，団地などの住宅地を巡回するようになって，児童書，特に絵本の利用が増えましたね。一日図書館も当初の蔵書構成を児童向け30％ぐらいと考えていたようですが，結局，一般書と半々になったようです。

3.5　地域住民との協働

巡回当日の一日図書館のステーション運営については，県立図書館職員による対応に限らず，市町村の教育委員会担当者や地域住民（駐車場主任）による支援があった。具体的な運営方法は各ステーションにより異なっていたが，例えば和光市の西大和団地の場合，「県２名，市１～２名，主任（駐車場主任－著者注）午前，午後交代各４名」であり，ありんこ読書会による『ありんこだより』も配布していた[53]。鷲宮団地では「県２名，町教委２～３名，駐車場主任８名」であり，『駐車場ニュースつくしんぼ』を配布，一日図書館の巡回当日に同町の広報車を使用していたという[54]。また大井鶴ケ丘団地では，県立図書館職員，町の教育委員会担当者，団地の女性らにより「一日図書館運営研究会」が開催され，一日図書館の運営の課題や方法について検討した記録もある[55]。このような受け入れ先の地域住民の協力があったからこそ一日図書館の巡回が可能であり，しだいに各地に図書館をつくる動きが拡大したことがわかる。

山岸：まさにその方々（駐車場主任ら）が一日図書館車の貸出や返却の主な戦力ですね。地域で顔が利くからね。県の図書館員はリクエストを受けたり……。

長谷川：リクエストが入っていた本を記憶を頼りに返却本の中から抜き出して，他に回せるようにしたりとか。巡回場所に到着すると机を出して，駐車場主任（ステーションマスター），今でいうボランティアの方々が貸出・返却の業務を手伝ってくれましたね。県の図書館員はひたすらカウンターと運搬箱を並べた間を往復するだけだったり……。

石川：基本的には地元の方々の支援体制があったということですね。

山岸：その方々が主な戦力でしたね。県の図書館員は読書相談の看板を出して相談の受付もしていました。地域にお住いの方々はお互いに顔見知りの方が多いですからね。移動図書館の利用を誘ったりもできますしね。

長谷川：酒井さんとよく話していたけど，「○○さん，本借りていきなさいよ」と，通りがかりの人の呼び込みをしてくれるのは，すべてそういう地元の方々でしたね。県の図書館員ではなかなかできないですね。

……（略）……

石川：和光市は当時，公民館図書室に限られ，住民によって「自分たちも移動図書館が欲しい」という運動が始まりましたが，県の移動図書館で各地を巡回する中で「私たちのまちも移動図書館が欲しい」というような声や動きがだんだん広がっていったという印象はありますか？

山岸：ありましたね！

長谷川：すごかったですね。所沢，入間，狭山あたりは住民サイドからそういう声が寄せられていましたね。

石川：県から図書館をつくる活動を支援するということはあったのでしょうか。

長谷川：それは無いですが，でも，私なんかはそういう活動に火をつけたりしましたね。移動図書館の現場では目の回るような忙しさもありましたから……。

3.6　一日図書館の巡回とステーション

一日図書館の開設条件は，「500戸以上の中高層集団住宅地」であり，「長時間駐車できるスペースが，住宅地内にあること（必要に応じて，施設内の活動も行なえる公的施設が開設場所に隣接していることが望ましい）」とされ，開設手続きは「市町村教育委員会の申請に基づき，県立浦和図書館長が指定する」[56] とされた。1975年には一日図書館１号車は10ヵ所，２号車は12ヵ所のステーションを一か月に１回巡回[57]，出動日は県立浦和図書館を９：00前後に出発，１－２ヵ所の巡回を経て16：30前後に帰館した。山岸氏のインタビュー記録からは当時の道路状況もわかる。

一方で，一日図書館の巡回にあたっては市町村教育委員会担当者との事前調整も必要であった。市町村の担当者は，駐車場所の確認や集会所等の施設借用，駐車場主任らの人員確保，PR活動などを担っていた[58]。この他に，春日部市（武里団地内大畑小学校のステーション）では，一日図書館の巡回以前から県と市との間で「むさしの号」の巡回に対する相互協力が協議されていた。1970年度からの「むさしの号」巡回の開始時には同市立図書館職員の協力や同館約200冊の新刊図書の積載なども行われた[59]。1972年度からは一日図書館の巡回が開始，1973年７月から同市の移動図書館「ふるとね号」の巡回が開始され，一日図書館が巡回する武里団地内のステーション（３ヵ所）では，一日図書館と「ふるとね号」との合同による巡回が実現した[60]。

長谷川：あの頃は道路の舗装状態も悪かったですから。道も無かったですし。山岸さんもあったんじゃない？　秋ヶ瀬橋で対向車のダンプと「チーン」ってサイドミラーが当たったり……。

山岸：だから本当に秋ヶ瀬橋を通るのは嫌でしたね。あまり道路が広くないですからね，昔は。だから和光に行くときは笹目橋を渡って国道254号線で行っていました。

石川：巡回中に車が故障したりすることもありましたか？

山岸：ありましたよ。例えば，帰りに川越街道でね，大井あたりだったと思うのですが，エンジンが止まってしまったんですよ！　原因がわからなかったのです。バッテリーの問題かなということで，近くの車屋さんか電気屋さんで充電したけど全然ダメでしたね。

……（略）……

石川：ステーションで停車しているときは，車内の空調はつけていたのですか？

山岸：やっぱり夏場は冷房，冬場は暖房をつけていましたね。エンジンをかければいいんだけど，エンジンの音がうるさいからね。

長谷川：あとはやっぱり排気ガスが問題になりますね。

山岸：駐車している間に集会所などで充電させてもらえればよかったのですが……。

長谷川：山岸さんが来る前の話ですけど，一日図書館の駐車場を決めるときに，地元には電気を使わせてほしいとお話ししてね。どうして必要なのかと聞かれましたが，走らないけど室内灯をつけておかなければいけないから必要ですと言って，団地の自治会長さんなどへお願いしてまわっていたみたいですよ。一日図書館を浦和市内で巡回をはじめたとき，Ｎさんが浦和市の社会教育課の新人の頃，熱心に南浦和と田島などの町内会長のところを回ったという話を聞きました。和光市ではＳさん，新座団地ではＯさん，狭山ではＳさんに聞けばわかると思います。

……（略）……

石川：春日部の武里団地にて市の移動図書館と一日図書館が２台停車している写真[61] を見たことがあるのですが，それはどのような協力体制だったのでしょうか。

山岸：春日部はまだ規模が小さかったんですよね。移動図書館だけ作ったけど，蔵書がまだ全然無いということで，それで県と合同でやっていました。ある程度期限を切って行っていまし

たね。

3.7　移動図書館の担当者

県立浦和図書館では「むさしの号」も含め一日図書館の巡回は館外奉仕課が担当していた。館外奉仕課には移動奉仕係と視聴覚係が置かれ，1972年度は前者に13名が配置，「一日図書館・移動図書館の運営，貸出文庫，配本所」と業務分掌が記され[62]，館外奉仕資料の選定や整理も担っていた[63]。当時の同館では，新設の一日図書館（２台）のほかに「むさしの号」（３台）を保有し，各台に２名の担当者のほか，整理担当も臨時職員を含め３名配置されていた[64]。1973年４月の同館の統計をみると，所蔵冊数約25万冊に対し移動図書館用図書が約11万冊（約44％）を占めていたことがわかる[65]。インタビュー記録から，各号車のシフトや移動図書館に積載する選書・整理についての状況がわかる。

山岸：はじめの頃は「むさしの号」は「むさしの号」，一日図書館は一日図書館というように担当が決まっていました。しかし途中から変わりましたね。

長谷川：なんだかやりづらいシフトだったよね……。

石川：「むさしの号」や一日図書館でも１号車は１号車，２号車は２号車など，はじめの頃は固定だったのでしょうか？

長谷川：一日図書館ができる前はペアが決まっていましたが，一日図書館ができてから新しく人が入ってきて組み方が変わりましたね。

中岡：ローテーションになったということですね。

長谷川：ただね，やはり担当としては車ごとに担当を決めた方がやりやすいんですよ。自分の担当エリアが決まっていると，蔵書構成や利用状況に対応しやすくなるわけです。それがローテーションになると全然わからなくなってしまう……。リクエストは，私が巡回していたころで１巡回100－120冊とかありましたけど，そうするとあの本は３日後に行くステーションで貸出しているとか，昨日借りられちゃったとか頭に入っているわけですよ。リクエストされた本が返却されているのをチェックできていましたが，ローテーションになると本の回転が頭でわからなくなってしまう……。

山岸：そうだったね。

長谷川：人が変わるとね，「前の担当の人は来ないんですか？」なんて利用者から言われるわけ。それで「今度私が担当になりました。よろしくお願いします」なんて言うわけだけど，それ以来，来なくなってしまう利用者もいました。そういう固定客が離れてしまうこともありましたね。

……（略）……

山岸：この頃は選書もすごかったですよ。実際に書店に行って現物での選定ですから。

長谷川：今は国際興業バスの車庫が浦和の新大宮バイパスのところにあるけれど，以前はここに日販の埼玉支店があってね。そこの倉庫にしょっちゅう行っていましたね。

石川：移動図書館用の本を選ぶということでしょうか？

長谷川：そうですね。

山岸：一日図書館の職員が実際に行って選書しましたね。

長谷川：巡回に行くと平均で1,700冊－1,800冊，だいたい2,000冊くらいの貸出があるからね。浦和の須原屋も含めて現物選定はよく行きました。

石川：選書の頻度はどのくらいでしたか？

山岸：月に２回くらいだったでしょうか。

……（略）……

長谷川：当時はＳさんという整理担当の人がいて，彼女は何も言わずに仕事をこなしていましたね。一日図書館を作るときは，結局何冊購入したんだろうか……，記録を見てもらえばわかるけれど，整理担当のアルバイトが２－３人来

表１．埼玉県内移動図書館貸出冊数（冊）[67]

年度	県移動図書館	左記のうち 一日図書館	（参考） 一日図書館駐車場数	市町村移動図書館	（参考） 市町村台数
1972	588,578	222,052	27	299,339	7
1973	626,595	296,593	29	948,151	14
1974	578,400	254,587	24	1,609,182	20
1975	526,281	208,150	22	1,794,884	24
1976	500,169	157,310	17	1,696,531	26
1977	589,812	139,859	15	1,754,194	29
1978	563,715	126,626	13	1,662,374	30
1979	435,481	101,915	12	1,698,093	31

ていました。整理方法は相当簡略化していましたね。一か月か二か月で１万冊くらいやっていましたかね。

中岡：そんなにたくさんの冊数ですか……。

長谷川：それがもうあっという間に足りなくなるわけですよ。

山岸：本が足りなくなると，書庫から古い本（移動図書館の蔵書）を出すんですよ。穴埋めしないといけないからね。

４．最盛期の一日図書館に内包された役割

一日図書館の貸出冊数をみると，巡回当初の1973年度がピークであり，埼玉県の移動図書館による貸出冊数のうち約47％をも占めていたことがわかる（表１）。一日図書館の最盛期は1970年代中頃までとみることができ，しだいに市町村の移動図書館の巡回開始と市町村立図書館の相次ぐ設置によって，一日図書館による貸出冊数・ステーション数は減少していく。一日図書館はその後，1986年３月で廃止となり１号車は鷲宮町へ，２号車は（1987年３月）北川辺町へ移管された[66]。

インタビュー記録や関係資料から一日図書館の成立と活動を遡ると，確かに巡回の背景には団地建設や人口増による図書館利用への要求や，市町村の図書館設置への機運の醸成があった。しかしそれだけではなく，巡回先を調整し，住民の中へ入り込み巡回を重ねる過程において，一日図書館を媒介にしながら市町村教育委員会担当者や団地住民（駐車場主任や自治会文庫役員）ら人と人との関係性が積み重ねられ，個々の地域との結びつきを深めていた。1970年代の一日図書館は，単に大規模団地へ大量の本を運んでいたのではなく，埼玉県立図書館を核とする「図書館」ネットワークを運んでいたといえよう。このことは同時に，後に拡大する図書館間協力や協力車巡回の基盤になるが，1980年代以降の一日図書館や「むさしの号」の分析については今後の研究課題としたい。

謝辞

埼玉県立浦和図書館の一日図書館，「むさしの号」へのインタビューに快く応じてくださいました長谷川周様，山岸輝雄様には深く御礼申し上げます。なお本研究は2019年度十文字学園女子大学プロジェクト研究，JSPS科研費JP20K02523による研究成果の一部です。

注・参考文献

１）「じっくり読んで下さい：18日から団地巡回」『朝日新聞』1972.1.12.；「大型バスを改造：一日図書館“むさしの号”」『埼玉新聞』1972.1.15.などがある。

２）自動車文庫，自動車図書館，ブックモビルなどの呼称もあるが，本稿では一般的に広く定着している移動図書館を用いる。

３）千葉県立中央図書館編『全国移動図書館実態調査（昭和47年４月１日現在）』[1972].

４）日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ編著『文化の朝はひかりから：千葉県立中央図書館ひかり号研究』日本図書館研究会，2017.

5）廿日出逸暁「文化の水平運動」『出版ニュース』286, 1954.10, p.2-3.
6）鈴木四郎「村々に読書会を：新しい青年文化活動」『むさしの』3, 1953.5, p.1.
7）日野市立図書館編『業務報告：昭和40・41年度』1967.
8）石川敬史「移動図書館の再発見」『図書館雑誌』109(7), 2017.7, p.426-428.
9）石川敬史「移動図書館の定義と台数からみえる課題」『図書館車の窓』94, 2013.8, p.5-6.
10）薬袋秀樹「戦後県立図書館論の系譜（Ⅰ）：1945-1969」『図書館評論』25, 1984.7, p.59-68.
11）埼玉県移動図書館運営協議会編『埼玉の移動図書館：30周年記念』1980.
12）中岡貴裕，石川敬史「和光市における移動図書館の歩み：インタビュー調査中間報告」『和光市デジタルミュージアム紀要』6, 2020.3, p.1-12.；川久保武子「親子読書会から移動図書館請願運動へ」『月刊社会教育』17(4), 1973.4, p.81-86.
13）原武史『団地の空間政治学』NHK出版，2012.（NHKブックス，1195）；原武史『レッドアローとスターハウス：もうひとつの戦後思想史』新潮社，2012.
14）日本図書館協会『日本の図書館：統計と名簿2019』日本図書館協会，2020.3, p.24.
15）鎌倉幸子『走れ！移動図書館：本でよりそう復興支援』筑摩書房，2014.（ちくまプリマ―新書，208）
16）石川敬史「大学図書館前へ「移動」する図書館」『図書館車の窓』107, 2016.11, p.4-5.　この他にも，地方を中心に創造的な実践をみることができる。
17）石川敬史「地域の伴走者としての移動図書館へ」『みんなの図書館』510, 2019.10, p.2-10.
18）大門正克『語る歴史，聞く歴史：オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店，2017.（岩波新書，1693）など多数。
19）桜井厚『インタビューの社会学：ライフヒストリーの聞き方』せりか書房，2002.など。
20）小黒浩司「日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループの活動について」『エビデンスアプローチによる図書館情報学研究の確立：図書館史研究にとってエビデンスとは何か？』http://user.keio.ac.jp/~ueda/eba/5/event070728_1.html　(2020.9.26確認)
21）石川敬史，中岡貴裕「オーラルヒストリーの手法を用いた地域図書館史研究の課題と展望：埼玉県和光市における移動図書館史調査から」『日本教育情報学会年会論文集』36, 2020.8, p.62-65.
22）三浦太郎「日本の図書館史研究におけるオーラルヒストリー」『図書館研究の回顧と展望』相関図書館学方法論研究会編著，松籟社，2020, p.79-115.
23）小林卓，大井三代子「戦後の図書館学教育と女性司書（1）：鬼頭當子と大学図書館」『実践女子短期大学紀要』34, 2013.3, p.121-142.
24）奥泉和久ほか「戦後公共図書館建築の歴史1：西川馨氏に聞く1960～70年代を中心に」『図書館界』72(2), 2020.7, p.54-59.
25）インタビュー調査の実施に先立ち，十文字学園女子大学研究倫理審査委員会に対し「人を対象とする研究倫理審査申請書」を提出し承認を得ている（承認番号: 2019-001）。
26）本研究の一環である和光市の移動図書館史に関するインタビュー調査については，2018年度から積み重ねたインタビュー記録を報告書（No.1）としてすでにまとめている（和光市図書館史研究会編『和光市図書館のあゆみ：移動図書館「やまびこ号」調査報告』1, 2020.3.）。
27）埼玉県編『新編埼玉県史』通史編7, 1991, p.730-732.
28）同上, p.720-722.
29）「移動図書館の充実について」1969.9.17（『移動図書館ニュース』22, 1970.5, p.14所収）
30）「埼玉県の現況：館外奉仕の背景」『移動図書館ニュース』11, 1964.11, p.2-5.
31）埼玉県立浦和図書館編『埼玉県立浦和図書館50年誌』1972, p.86.
32）同上. 同資料によると，予算総額12,596,000円，その内訳は車両製作費6,550,000円，図書購入費5,052,000円，運営費994,000円であった。
33）埼玉県議会編『埼玉県議会会議録：昭和46年9月定例会』[1971], p.23.
34）同上, p.1101.
35）木花鉄男『都市部における都道府県立図書館の移動図書館はいかにあるべきか：埼玉県における一日図書館の事例』1972, p.10.　同書によると，2号車については予算総額12,276,000円，その内訳は車両製作費6,550,000円，図書購入費4,800,000円，運営費926,000円であった。
36）埼玉県議会編『埼玉県議会会議録：昭和47年2月定例会』[1972], p.41.
37）1968年6月27日（栗原浩の4選）と1972年7月2日（畑和の初当選）に埼玉知事選挙があった（前掲27『新編埼玉県史』通史編7, p.817-822.）
38）埼玉県公共図書館協議会編『埼玉の公立図書館：昭和46年度』1971.8, p.23.
39）江袋文男「一日図書館車むさしの号誕生」『図書館雑誌』66（3），1972.3, p.34-35.
40）山岸輝雄「一日図書館とともに三年の歳月をふりかえって」『一日図書館1号車満三年のあゆみ』埼玉県立浦和図書館編，1975, p.4-5.
41）「一日図書館1号車誕生までのあゆみ」『一日図書館1号車満三年のあゆみ』前掲, p.8.
42）埼玉県公共図書館協議会編『くらしのなかに図書館を：埼玉県公立図書館白書1973』1974, p.2-6.
43）「県立図書館の本年度重点計画は」『移動図書館

ニュース』32, 1974.7, p.1.
44）埼玉県立熊谷図書館編『移動奉仕業務の概要：移動奉仕のしおり』1979, p.5.
45）「大型図書館車が来ます」『広報わこう』29, 1972.1.1, p.6.
46）同上.
47）「一日図書館１号車の利用のあしあと」『一日図書館１号車満三年のあゆみ』前掲, p.10.
48）「一日図書館停車時間が延長に」『広報わこう』36, 1972.4.15, p.12.　同記事には西大和団地へ４月24日（月）に，諏訪原団地へ５月２日（火）に巡回することが周知されている。
49）埼玉県立浦和図書館編『一日図書館研究集会資料（１年間の実績）』1973.1, p.2.
50）同上, p.4-8.
51）「くらしのなかの一日図書館」『移動図書館ニュース』25, 1972.3, p.1.
52）彩の国ビジュアルプラザの「映像公開ライブラリー」（埼玉県川口市）において，一日図書館の活動の様子が記録された映像が保存されている。
①「ゆたかな団地生活を（埼玉ニュースNo.170）」1972, 埼玉県総務部広報課.
②「お母さんの自衛消防隊・むさしの号（こんにちは埼玉No.95）」1972, 共同テレビジョン.
③「読書で結ばれる母と子の心（埼玉だより）」1973, 読売新聞社.　本映像では，オクラホマミクサーを流しながら新座団地を巡回する一日図書館と，西大和団地「ありんこ読書会」の活動が紹介されている。
④「ぼくの，私の図書館：地域文庫活動から（埼玉だより）」1975, 読売新聞社.
53）「駐車場の運営」『一日図書館１号車満三年のあゆみ』前掲, p.42-44.
54）同上.
55）「集会活動を本格的に　一日図書館むさしの号「実あるものに」と関係者話し合い」『読売新聞』1972.4.5.（大井町史編さん委員会編『大井町史』資料編4, 近現代2, 新聞資料, 1986, p.505-506所収.）
56）前掲41）「一日図書館１号車誕生までのあゆみ」p.9-10.
57）埼玉県立浦和図書館編『昭和50年度移動奉仕課利用統計』[1976], p.1.
58）「一日図書館開設のための確認事項」『一日図書館運営研究会』[埼玉県立浦和図書館編], 1975.1.20, p.2-4.
59）春日部市立図書館編『団地住民に対する奉仕活動：県立移動図書館と市立図書館との協力奉仕』1971, p.2-4.
60）「７月から巡回をはじめます移動図書館“ふるとね号”」『広報かすかべ』198, 1973.7, p.3.
61）「春日部市における“ふるとね号”と“一日図書館むさしの号”合同貸出し（武里団地にて）」『移動図書館ニュース』31/31, 1974.3, p.1.
62）「埼玉県立浦和図書館組織機構」『要覧1972』埼玉県立浦和図書館編, 1972.4, p.26.
63）「埼玉県立図書館管理規則（1960.3.31 教育委員会規則第５号）」『要覧1973』埼玉県立浦和図書館編, 1972.4, p.27-32.
64）「人事」『移動図書館ニュース』26, 1972.6, p.8. ここには氏名と担当（各号車）が記されている。
65）「図書館所蔵資料・機材（昭和48年４月１日現在）」『要覧1973』前掲63), p.17.
66）埼玉県移動図書館振興協議会編『埼玉県移動図書館振興協議会の歩み』2005, p.29-30.
67）表の作成には次の資料を用いた。埼玉県移動図書館運営協議会編『埼玉の移動図書館：30周年記念』1980, p.2.；「一日図書館利用統計資料」[1980]（山岸輝雄氏所蔵資料）.